

薬物依存は時代とともに深刻化し、ヘロインやコカイン系のもまで登場してくる。

その間にカルロスは、何度も NGO の支援施設へ誘われ、数回入ったこともあった。それでも結局、路上生活を抜け出すことはできなかった。薬物依存のひどい子ども・若者の多くが、カルロスと同じような運命を辿っている。

カルロスは、自分が 4 人きょうだいの長男で、全員異なる父親を持つと話した。義父に連れられ、5 歳くらいの時に北部の町からメキシコシティへ来て、見知らぬ人の家に置き去りにされた。そこで奴隷のようにこき使われることに嫌気がさした少年は、路上へ飛び出し、「ストリートチルドレン」の仲間入りをしたのだ。

薬物を使っていない時のカルロスは、時に饒舌になり、母親との思い出話をしてくれたこともある。息子を守りきれなかったのであろう母親に対して、彼は特に恨みを抱いてはいないようだった。むしろ、いつか母親の力になりたいと語った。

映画が好きなカルロスを、私は何度か映画館へ誘った。なかでも「チャーリーとチョコレート工場」を観た時のことが、忘れられない。映画は彼の名前「カルロス」を英語にした名を持つチャーリー少年が、コンテストを通じてチョコレート工場の次期社長の座を手に入れる物語。最後に少年は、チョコレート工場の現社長と暮らすという条件をのんで未来の社長になるよりも、貧乏だがあたたかい自分の家族と暮らしつつづけることを選ぶ。その姿に自分を重ね合わせながら、カルロスは「これは僕の映画だ」と言った。そして翌日、私のパートナー（篠田有史）が再び映画に誘った際、「チャーリーとチョコレート工場が観たい」と言い、もう観たのでは？と聞いても、「観てない」と言い張って同じ映画を観た。そしてまた「僕の映画だ」とつぶやいた。

あたたかい家庭を夢見た少年は、路上の仲間たちにそれを求めた。年上の路上青年を兄のように慕ったり、自分に関心を寄せてくれる少女にのめり込んだり、負の感情から抜け出すための愛を求めた。自分は家族にすら見捨てられたゴミ同然の存在だと思い込んでいたからだ。しかし、期待はたびたび裏切られ、心はますます傷ついていく。チャーリー少年のように家族と暮らしたいと願いながら、それがどんどん遠のいてゆく人生。その絶望に歯止めをかけ

ることは、誰にもできなかった。

カルロスの消息は、すでに 10 年以上も前からわからない。ある NGO スタッフは、「交通事故で死んだという噂を聞いた」と話した。だが、私は彼が故郷に戻り、母親を助けながら穏やかに暮らしているかもしれない、と思いたい。

カルロスの苦しみは、大人の大半が、ただ目の前のことをこなすことに追われ、子どもの「未来」はおろか「今」すら考える余裕を失った社会によって生み出された。余裕のない大勢の大人たちもまた、同じ社会に育てられた。そこでは、「余裕のある」富裕層もまた、世界の未来ではなく、自分たちのことしか考えていない。

ユニセフは、30 年以上前にカルロスのような子どもが「世界中で増えている」と、警鐘を鳴らした。対策を打たなければならないと訴えた。しかし、途上国の都市の路上には、今も大勢の「ストリートチルドレン」がいる。それは、私たちが未来に「理想とする社会」を思い描いて、そこに至るための行動を起こそうとはしなかった結果にほかならない。

今、「ストリートチルドレンを考える」ことは、まさに「2074 年を考える」ことだ。子どもたちを路上へと追い立てたもの、社会の根底にある問題、それを見極めて、50 年後に向けての変革を起こしていく。その変革に携わる人間を育てる。そんな意識が、私たちには求められている。「ストリートチルドレン」という言葉が不要になり、2074 年の子どもたちの人生が真に豊かなものになるには、何が必要なのか。それを考えることが、2024 年を生きる私たちに課せられた義務だろう。

日本では、路上暮らしの子どもをみかけることはほとんどないが、カルロスと同じような悲しみや痛みを抱え、別の形でそれをやり過ごす、あるいはその絶望に押しつぶされている子どもは確実にいる。また、たとえ身近な大人たちが十分気かけ、愛情を注いでいるとしても、世間の常識や社会の仕組み、空気に追い詰められている子どもも多い。そうした子どもたちが、問題は自分ではなく社会にあることに気づき、それを変えていく側に立って、よりよい社会を築く当事者になるかどうかは、私たち大人の出方にかかっている。50 年、100 年後の未来の理想のために行動する覚悟を持って、今日からまず 2074 年を想い、行動していこう。